

全日本選手権 M21E を振り返って 村越 真

村越 vs 鹿島田

今回の男子選手権のコースは、優勝タイムが98分、3位は110分を超えるという全日本選手権史上稀なハードレースとなった。コースにはルートチョイスの余地が多く、それが実際にレース結果に影響しているという点では、クラシックの見本的なコースと言えるだろう。上位である村越と鹿島田のレース展開を見ながら、男子エリートコースを振り返ってみよう。



1番から二人のルートは分かれている。

「村：カッシーのルートは全然見えなかった。自分以外のルートがあるとは思えなかったが、カッシーも松沢もそれぞれルートが違うのは驚きだ。でもカッシーのルートが見えたとしても多分自分のルートを選んだだろう。僕にはカッシーのルートは1番にしてはリスクが多いように思う。ただ僕のほうがラップが遅いのは意外。もたついていたのは確か。」ここで村越は、カッシーより18秒遅れ。

「鹿：逆に僕は村越さんのルートは見えなかった。取るとしたらまっちゃんのように尾根周りだけこれは明らかに遅い。ただ、直進部分は見通しも悪く細かい対応は出来なくて不安になったけど、最後の尾根の壁まで我慢していこうと決めました。」

カッシーが別項コメントの中でいっているように、このあたりの沢は、数こそあっているものの、地図表現には繊細さが無い。また竹林でスピードが上がらずに選手にはフラストレーションがたまっただろう。それにいかに耐えるかは、レースの一つのポイントになったはずだ。

2番はルートチョイスの余地はない。カッシーも村越もミスはないが、トップである菅原から30秒近くも遅い。



3番へのレッグは前半の山場だ。大きなルートチョイスはないが、どこをコンタリングするか、どこからアタックするかといったプランニング上の課題が山積している。

「村：登りすぎるのは嫌でした。でもコンタリングが下すぎると、大回りになってしまうし、とりあえず上の道を越えて、斜面を半分くらいまで登って、コントロールの高さあたりをコンタリングしようと考えました。実際には、それより低い位置からコンタリングを始めてしまったので、斜面は延々続いているし、途中の植生界やAとBの境なんか全然わからず、しかも思ったより可能度も悪かったので、ここでもフラストレーションがたまって、投げやりになりかけましたね。しかも思ったより低い位置を進んでいるので、沢の数が全然合わない。小径のある尾根の手前の沢だと思って喜んで沢から尾根に回り込んであがると、道はなくて、ええ？まだ先なの？と思って、その次の尾根を半信半疑で登りました。コントロールの手前の沢も全然見通しがきかなくて全体像が分からず、不安でした。手前に張り出した尾根は見えたけれど、コントロールの領域に入るまで不安でした。フラッグが見つかったのも、ほとんどまぐれみたいなもんです。自分では左にあると思って動こうかどうしようか、もう一度周囲を見ると、前方にコントロールが見えたんです。」

「鹿：まずは道まで出ようと、方向だけ決めて動き出しました。少し登りは多いけど白い林をつなぐのがいいかな、と慎重に登り始めると、いつまでたっても道に出ない。結局通り過ぎてしまったようで、進路をコンタイルに取り直して進むと白い林に出ました。その後は植生の感じや地形もつかみきれず、大まかな方向で尾根まで出ます。コントロールのある尾根の手前の沢の上部の緩くなった部分に出たので、そこから直進して手前の尾根をチェック、奥の沢に入り、「これででてこなかったら終わりだよな」とそろそろ降りていくとありました。こ

のコントロールをうまくとったところで気分的に波に乗ったと思います。」

この時点でカッシーは、すでに村越に40秒以上のリードを奪っている。それでもこの時点で1位である加賀屋よりも1分以上も遅い。

4番も短いレグながら、ルートチョイスの余地がある。ラップを見ると、ルートによって意外に差がついている。

「村：カッシーのルートをとるか、自分のルートをとるか迷いました。最初に気づいたのはカッシーのルートです。でも15mくらい余計に登るし、上からのアタックはちょっと嫌でした。僕のルートはあまり気を遣わずにすむし。アタックの小径は全然はっきりしなくて、こんな取るなよな、せめて「不明瞭な小径だろ」と思いながら走ってました。最近は地図調査をすることが多くて、記号の解釈の違いにはすごく敏感になっちゃって。コントロール斜面はわかりにくかったけれど、白く抜いてある部分はわかったので、あまり不安なく進めました。ただ、ここっというところにコントロールがなく、一瞬立ち止まってしまった。やはり先だろうと、ちょっと動くとフラッグが見えてラッキー。上から降りてきたら難儀だっただろう、幸運でした。」

「鹿：村越さんのルートも見えただけ道を外れてからのコンタリングが藪そうに見えました。上からの方が「どうぞ通ってください」といわんばかりに沢がBに抜けたので。アタックの不安と見つけた時の心境はまさに村越さんと一緒ですね。」

村越はベストラップをたたきだし、1位の加賀屋に1分以内に迫る。

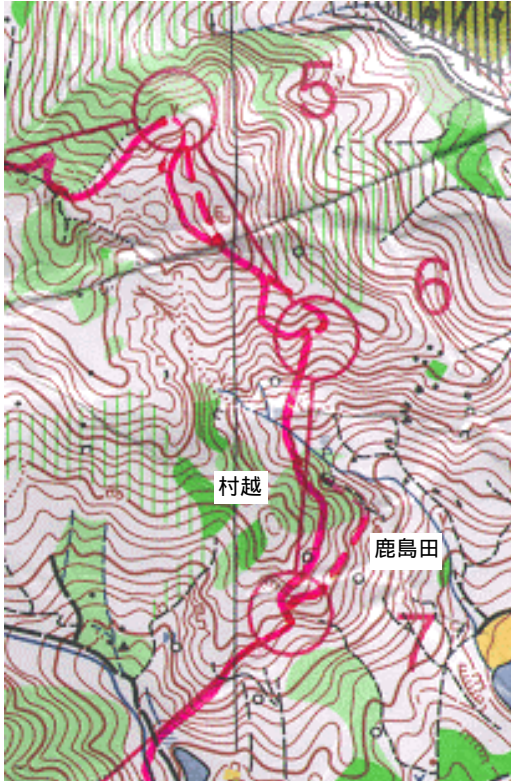
山場の5番である。しかも、ここでのルートチョイスは後半の山場10番のルートへの布石となっている点で

も興味深い。このレグに入る前にどれだけルートに対する地図読みができていたかが問われるクラシックらしいレグである。

「村：3番への登りなんかで、ここのルートは随分考えました。カッシーが通過した山腹も随分みただんですけど、これというルートを発見できなかった。まあシンプルにということ意識して結局自分のルートにしたんですけど、悪くはなかったと思います。ミスはしてまずけど、それを引いても1分くらい差がついているので、意外とカッシーのルートもよかったですよね。あと、アタックでミスをしています。アタックの手前の尾根線ははっきりしないので、注意が必要だと思っていました。かなり丁寧に確認して、歩測もしていたんですけど、手前の沢に降りかけています。地図よりもはるかにAとBの境界がわかりにくかったのもあるでしょう。少し下って、どう考えてもイメージと合わないと思ったので、30m下ったところで、先に見えるピークまで念のためにいってみようと思っていったので助かりました。加賀屋はここで同じようなミスをして、崩れてますね。この日はこういうセンスがよかったというか、これは戦略の問題です。やはり斜面のアタックは大事に、と前日からかなり意識してたんで。」

「鹿：これは僕もずいぶん考えました。村越さんのルートも見えただけ距離的に長すぎるので却下しています。山腹のコンタリング道をつなぐルートは、地図を良くみて用心しながらでないに進めなくて、それほどスルスルはいけなかったけど、こういう情報処理が多い部分のスピードには絶対的に自信があったので、あせらず必要に応じて立ち止まりながら救護所までは無難にこなせた。救護所からの上り返しも良く足が動いて、このあたりでは自分の調子よさを実感してます。」





6番、7番、8番とファインなナビゲーションを要求されるレグである。地形以外に大きな手がかりがないので、地形表現の甘さが難しさに拍車をかけている。

「村：6番は、尾根線までコンタリングで出ようと思ってましたが、すぐに東の尾根を登ってそのまま主尾根に近いところまで上がってしまいました。コンタリングしてアタックが曖昧になるくらいなら尾根線まで上がってしまえと思って、さっさと上がります。最後にコンタリングして尾根1本分先に来ているので、そこから歩測して100m、地形的にもいいような感じでしたが、確信はないです。通り過ぎて、手前にいるか向こうにいるか分からなくなるのは嫌だったので、直下の沢を一度覗いて、コントロールがないのを確かめてから隣の沢にいきました。スピードはかなり落ちてます。」

「鹿：このレグで村越さんが尾根を行ったのは意外、コンタリングで尾根へ抜けるのはスムーズにいったし、あとは尾根が平らになる部分まで下ればいい。ところが思ったより距離が遠かったので不安になって右手の斜面にちょっと降りてコンタ気味に進みました。この沢かな、と思ったところにコントロールは見えなくてももう少し進むとそこはもう先の沢とすぐわかったので戻ったより下にありました。+30秒」

「村：7番も嫌なレグです。沢に降りて崖のところからコンタリングすればコントロールのちょっと下気味に出ると思ってましたが、崖らしいのもよく分からず、また斜面も竹が倒れていて、すごくストレスがかかりました。自分では一つ手前の沢かなというところでよく地

図を見ると、すでに斜面の方向が南向きが変わっているのに気づきました。それでよく地図をみると、確かに右の尾根はかなり張り出しているの、この沢がコントロールのある沢かもしれないと、10秒くらい悩みました。こんなところでロストしたら2分のロスじゃすまないだろうなって。沢の下のほうの様子はよく見えなかったんですけど、おそろおそろ下に下るとフラッグがみえて、ラッキー。今日はいい勘してるなと思いましたよ。ただ、さっきおいてきたはずの安齋に先を越されたのが悔しかったですね。」

「鹿：まったく一緒。ほくもコントロールの上で悩みました。」

「村：8番も、コンタリングしている水路に乗ったり、それをたどったりするのに手間取って、15秒以上ロスしてますね。アタックもいただけない。とてもラフにやってしまった。コントロールのそばでロストしかけた時に富田が左からずっと戻ってきたので、ああ、向こうにはないと確信したんだなと思って、僕も右に動くと思えました。」

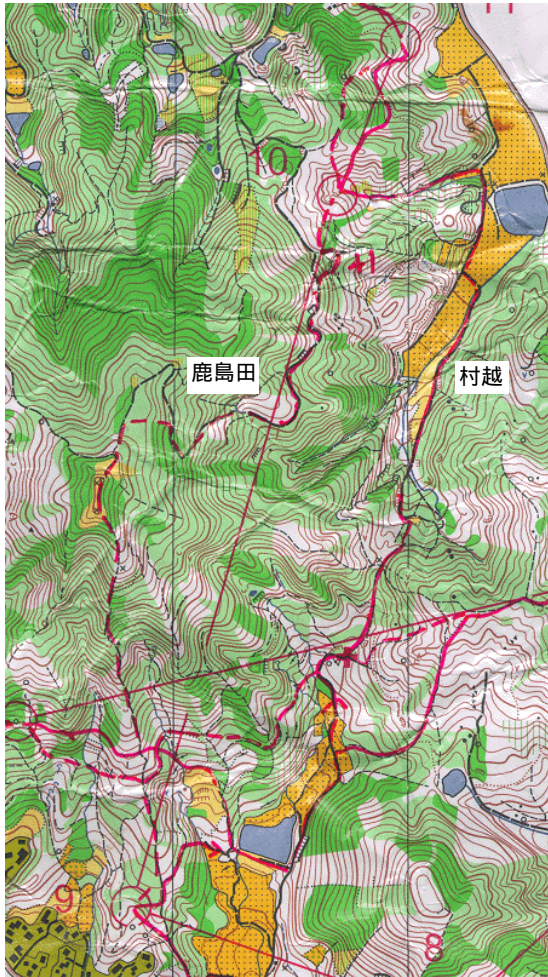
「鹿：8番へのコンタ道は途中までは6番があるいは表記しなくていい程度のふみ跡でした。」

8番までで、カッシーは村越に大差の2分23秒差である。

9番は特に難しいレグではない。だが、こういうレグに往々にして落とし穴があるものだ。9番の時点でもまだカッシーは村越に1分近く勝っているのだが、このレグでの1分のミスがその後の逆転の伏線となる。

「村：これは特に難しいところは何もないので、ただ周囲にいた富田にひばられてスピードアップすることだけを考えていました。」

「鹿：あまりにも凡ミスをしてしまった。こういう凡ミスを犯すと、そのタイム以上に後への影響が大きい。これは広島や奈良もまったく一緒です。」



プランナーもルートチョイスを要求するために組んだであろう 10 番である。これが最終的には村越とカッシーの 1 位と 2 位を分ける。

「村：どうしたらいいのかはずっと考えていました。山に登るというのもちらっと見えましたけれど、主要な候補にはならなかった。ずっと考えていたのは、右の峠を越える道を選んで、峠を越えたところから、小径を利用して山の中でコントロールに近づいていくルートです。で、あとはどうやったら峠を通る道に出るかです。ぱっと見た時には、大出戻りしようかと思ってたんですが、そのうちに、5 番にいくときに使った湖の土手が走れるということに気づいて、この部分も問題は解決。

その後もしばらくルートを見ていると、峠のあと小径を走るのはあまり得ではないと気づきました。結局 3 番の道と同じところまで落ちてますから。もうこうなれば道を迂回だ。もう山の中でストレスを感じたくないというのもありましたから。」

「鹿：このレッグはずいぶんと考えたにもかかわらず村越さんの通った池の脇から下の道に出るルートが見えませんでした。8 番からきた方に戻るかあるいは救護所付近まで斜面に行くかの選択だったから「だったら登っちゃえ、」と山登りに腹を決めました。尾根道を走りながら、「じゃあ山頂の広場まで 10 分で行こう」て自

分で決めてがんばったら 10 分半くらいかった。ぱかぱかしいけど、そんなことで焦りを感じて下りをがんばって走ったら、アタックミスをした。広島の時と同じようなミスで「ああ、またやったな」と。この時点でトップとの差はまだ 1 分強なんだけど、ここで精神的には負けてしまった。」

カッシーや松沢も、峠に向かう道への出方が思いつかず、それが山登りルートの直接の選択理由になっている。5 番までのルートで、山腹をコンタリングするルートは取る気にならなかったようだ。ラップは開いているが、カッシーはミスしているので、実質的な差は 1 分程度である。

勝負所は過ぎたが、11 番以降も手が抜けない、体力的にも楽のできないレッグが続いている。結局ここでがんばりが 3 分以上の大差がつくかどうかを決めた。

「村：11 番は、実は最初道を回ってやるかなと。もう山の中のストレスはこりこりだったので。ただ、10 番で周囲の様子を見てから最終的に決めようとは思ってました。それに 11 番に向かって斜面にみぞがあるので、山の中のルートは全然難しくはない。結局山の中をいきました。ルートは簡単でしたが、みぞからのアタックはひやひやでした。みぞの曲がりらしきところからほぼ東の方向を見たんですけど、それらしい浅い沢はありそうもなく、一瞬「マジかよ」と思いました。右手にはない、で左手を見ると、かすかに浅い沢。大きさも方向も全然違うよなと思いましたが、他に可能性がないので、そちらに動くと、ありそうな位置にすぐフラッグは見えました。地形表現は随所に今一つでしたが、こういうフラッグの置き方は非常にフェアだったと思います。」

「鹿：村越さんのルートがはじめは見えていました。けど、脱出するときまっすぐな方向はやぶかったので、左気味にいったらピークがすぐに見えて結局尾根つたいに行きました。ところが尾根上が藪いしけっこう盛り上がっているの、すぐに右手の斜面を斜めに折り始めたらこれがひどかった。かなり藪くてコントロールへと降りていく尾根にまた乗るまでにずいぶんとかかってしまいました。」



「村：12番とか13番は、ここまで来たらそろそろ楽させてよと言いたくなるレッグです。でもこういうところに競技者の底力が問われるんですね。そういう意味ではいいレッグです。12番は地形のイメージが1:15,000の地図ではよくわかりません。1:10,000を見ると納得できるんですけど。最初手前の崖のほうからあがろうと思いましたが、くさび状の線を回り込むとコンター1本以上楽できるだろうなと思ってそうしました。実際道からはそびえるように見えていた尾根は、けっこう楽に越えられました。13番は迂回を考えていたんですが、結局縁をつきることになりました。これは楽だったんですけど、崖のほうはどうしようもなく、左に少し動いて登れるところを探さなければなりませんでした。」

「鹿：アタックは問題ないけど、途中のつなぎでわざわざ崖の上の墓のあるピークにのぼってしまっています。これが思いの他のロス。畑周りの細かい地図読みは相変わらず苦手ですね。13番は崖はのぼれず結局オープンの脇から登っています。」

レースを通じて

レースが終わってみると、予想以上の大差がついていた。だが、そのきつかけは些細なものに過ぎない。前半から中盤に至るまで、いかに確実なアタックでロスを最小限にすることが大きなポイントだが、それでも防ぎきれないロスやもたつきにどれだけ耐えられるかが、ロスをなくすこと以上にレースの決め手であった。おそらく村越と鹿島田以外の全てのランナーはその部分で脱落していったに違いない。そして結局最後まで我慢して走った村越が栄冠を手にしたのだ。

「村：我慢はして走ってましたね。もうそれだけといっても過言ではない。ラップ分析をみてください。9番から12番まで連続4ラップでトップラップです。しかもベスト3の88%とか90%です。我慢した結果がこれだけ如実に結果に出ているのは自分でも驚きですね。他人ごとのように感動的です。」

「鹿：結果の差の割には自分のレースを悪く思っていない。特に中盤までのここぞというラップ1番、3番、5番ではほぼラップをとってます（たぶん）から。反面、自分に足りないのは後半、勝負が見え始めてからの集中力の持続と疲労が闘志を超えそうになってからのセルフコントロールです。でもこれは問題点を書き出すのは簡単だけど、実行するのは難しい。これを克服しなければ絶対に全日本チャンピオンにはなれないでしょうね。」

募集！ 募集！

2000年度 全日本リレー大会 長野県選手！

長野県出身の大学生のみなさん。2000年秋に全日本リレー選手権が開催されます。長野県では2000年度も選手団を送り込みます。日本選手権クラスへのエントリーはもちろん、ジュニア選手権クラスにも参加予定です。全日本リレー大会は学生に限り、現在の居住地が長野県でなくても出身高校が長野県内であれば、長野県代表選手となる資格があります。こうした学生を含め多くの人材を長野県オリエンテーリング協会では求めています。

1999年度、兵庫県で開催された全日本リレー大会で、長野県男子は選手権で4位という過去最高の順位をあげることができました。また女子も9位と健闘しています。こうしたメンバーに混じって代表の座を競う学生メンバーを我々は待っています。またジュニア選手も広く募集しています。

2000年は長野県の選手団として富山に乗り込みましょう！

連絡先 全日本リレー長野県チーム監督 丸山茂樹
Phone: 026-246-9467
E-mail: nagano-kantoku@orienteering.com
<http://www.orienteering.com/nagano/>

Road to Toyama2000